

交通安全観音

島根県立大学短期大学部名誉教授 仁照寺住職 江角弘道

童謡詩人の金子みすずは、「いのち」と「このころの宇宙」を歌った感動的な詩を多く残しています。「金魚のおほか」は、愛する人の死に関連した詩です。

金魚のおほか

暗いさみしい土の中、金魚はなにをみつめてる。
夏のお池の藻の花と、ゆれる光のまぼろしを。
しずかなしずかな土の中、金魚はなにをきいている。
そつと落ち葉の上をゆく、夜の時雨の足音を。
つめたいつめたい土の中、金魚は何を思ってる。
金魚屋の荷の中にいた、むかしむかしの友達を。

(JULA 出版局「金子みすず全集」から引用)

これは、死んだ金魚のことを歌っていますが、金魚になぞらえて、実は人間のことを歌っています。亡くなった人が、墓の中で見たり、聞いたり、思ったりしているであろうと作者は歌っています。子供に先立たれた親にとっては、この歌は亡き子のことをありありと思い出させ、涙を誘います。

平成11年12月26日、20歳の大学生だった私の娘と友達3人の乗った車は、飲酒運転の車に正面衝突され大破しました。この事故で、娘も含め3人の女子学生が即死しました。その後、この詩「金魚のおほか」

か」をたまたま読んだとき、まるで娘が生きて話しかけてくれるような感覚におそわれました。娘は私の心の中に生前の姿のまま生きていたのです。理不尽な死をとげた娘のことは、いつも心の中にあります。思い出すたびに悔しさ・悲しさがこみ上げてくるのです。

不思議な縁で、娘の死後3年が経過した夏に、浄土宗の僧侶である河波定昌上人(東洋大学名誉教授)の法話を聞く機会がありました。法話の中で、これまでよく解らなかった「南無阿弥陀仏」の意味を詳しく教わりました。南無阿弥陀仏(Nam amita Buddha)とは、サンスクリット語の音訳であり、南無(Nam)は、頭をさげること、帰命、帰依という意味です。阿弥陀(a mita)は、阿(a)が「無」で後に来る語を否定し、弥陀(mita)が「計量する」、「計算された」の意味で、阿弥陀(amita)で「計量することを否定する」すなわち「計りしれない」、「無量」と訳します。つまり阿弥陀とは、「計り知れないもの」、「計り知れないのち」、「計りしれないほど大いなるもの」との意味になります。仏(Buddha)は、覚者(悟れる者)の意味です。従って、「南無阿弥陀仏」は漢訳すると「帰命無量寿仏」となるということを知りました。さらに、「般若心経」を一言で言い表すと「南無阿弥陀仏」となることを教えて頂きました。このような説明は、それまで聞いたことがなく、仏教の教えが心に響きました。

法話後に、「亡くなった娘は、どこにいったのでしょうか」と上人にたずねてみました。河波上人は「お嬢様は、観音様ですね。」とだけ答えられました。その時は、娘を亡くした悔しさで涙があふれて、「悔しいけど、娘は、観世音菩薩となって、父母を導いている。そんな尊い菩薩様などになつてほしくなかった。」と思いました。その後、「お嬢様は、観音様ですね。」という言葉を思いつつ、毎朝少し早く起き、通常の勤行の前に、木魚を叩きながら1時間ほど念仏をするようになりました。念仏の仕方は、「ナム・アミ・ダブ」と3拍子で口称念仏を繰り返す「打ち込みの念仏」方法で、一心に阿弥陀仏を念じる「念仏行」です。この「行を行ずる」ことの中で、「光明」を見る(経験する)と教わりました。

「娘は死んでどこにいったのか」と念仏しながら娘のことを思っていると、次のような事案に行き当たりました。それは、私が結婚する前には、娘は世の中のどこにもいなかった（いなかったから「無」あるいは「空」と言えます）。そして、昭和54年に二女として生まれてきて、私たちと20年間一緒に暮し（この生きていた時は、實在「色」と言えます）、そして交通犯罪に遭遇して死んでいった。だから、今はこの世の中のどこにもいないということ。つまり、いのちが無（空とも言える）から出てきて實在（色とも言える）となり、實在（色）から無（空）へと帰っていったこととなります。般若心経には、有名な語句「色即是空 空即是色」があります。並べかえて「空即是色 色即是空」とすれば、「空」↓「色」↓「空」と展開していることがはっきりと受け止めることができました。私たちは「空」から来て「色」となり、そして「色」からまた「空」となる存在であることがよくわかりました。

河波上人との出会いから念仏行を続けて1年経過した頃、自分を超えた計りしれない大いなるもの（阿弥陀仏）のおかげで、今、自分が生かされているというありがたさで涙を流しながら念仏していました。河波上人が、「念仏して光明を経験すると『其れ衆生有りてこの光に遇うものは三垢消滅し身意柔軟に、歡喜踊躍して善心生ぜん』（無量寿経）」という心境になって、身も心も囚われがなくなってゆく世界が現象する。」と話されていたことを思い出しました。「念仏行」を行っていると、「悔しい・悲しい」という感情から解放されて行く自分を発見していました。「空」に帰って行った娘は、そこで父母を見守る観音様になっていると思えるようになりました。観音様になってほしくなかったという時期は、まだ、娘を自分の中に抱え込んで、我が子、我が子と思っていたのですが、本当は仏様の子なのです。我が子と思っているから、当時は悔し涙を流しましたが、念仏をしていると、悔しさ・悲しさが昇華されて、悔しさ・悲しさの質が変わってゆきました。そして、次の「千の風」のように、「我が子」という思いから、自分を超えた「仏の子」となって、大きな空を飛びまわっているように思えました。

千の風になって（作詞 不詳 訳詞 新井 満）

私のお墓の前で 泣かないでください
そこに私はいません 眠ってなんかいません
千の風に 千の風になって
あの大きな空を 吹きわたっています
秋には光になって 畑にふりそそぐ
冬はダイヤのように きらめく雪になる
朝は鳥になって あなたを目覚めさせる
夜は星になって あなたを見守る
(以後を略す)

「我が子」という思いを超えて考えてみると、私達は、私達を超えた「大きな存在」＝「仏様」に生かされていることがわかります。

その後、七回忌（平成17年）には、観音様になった娘を思い、私の住職をしている寺の境内に観音菩薩像（高さ3.5m）を建立し、台座には娘の願いである「交通安全」のことを祈って、「交通安全観音」と書き記しました。この頃から、亡き子は墓から出ていっているような気がしています。そして、「千の風になって」の歌のように、目に見えない「大きな存在」＝「観音様」になって、大空を飛びまわって、父母を見守り、縁のあった人々を見守り、そして、「飲酒運転など絶対にしてはいけない世の中であれ」とすべての人を見守っていることが確信できます。



交通安全観音